

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中井 允子
論文担当者	主 査 竹島 泰弘
	副 査 岸本 裕充
	副 査 石原 正治
学位論文名	Choroidal Thickness Changes after Strabismus Surgery in Children
	(小児の斜視手術における脈絡膜厚の検討)
論文審査の結果の要旨	
斜視は小児の一般的な眼科疾患のひとつである。斜視手術における外眼筋操作が前眼部虚血を引き起こすことは知られているが、斜視手術の脈絡膜への影響については知られていない。学位申請者らは、斜視手術の脈絡膜への影響を明らかにするために、水平斜視に対して手術を行った小児を対象とし、Swept source OCT を用いて脈絡膜厚の検討を行った。 2016年7月から2017年10月に水平斜視に対して兵庫医科大学病院眼科で手術を行った小児の30例56眼（男児15例28眼、女児15例28眼、年齢5～16歳、平均12.6±3.0歳）を対象とし術前、術翌日、術2週の中心窩下と耳側及び鼻側の脈絡膜厚を測定し、各測定部位に対して、術前後および操作筋による差について検討した。 外斜視23例、内斜視7例で、外直筋操作群は42眼、内直筋操作群14眼であった。中心窩下、3mm耳側、3mm鼻側の脈絡膜厚は、術前277.0±63.9μm、286.7±67.3μm、131.0±41.2μm、術翌日は276.3±65.7μm、286.1±69.7μm、129.6±42.8μm、術2週は280.8±69.5μm、295.6±68.2μm、136.3±37.4μmであり、耳側において術2週で有意な増加を認めた（p<0.001）。その変化は外直筋操作群では有意であったが、内直筋操作群では有意差はみられなかった。 術中・術後の血液循環の変化、炎症、外眼筋操作による筋肉の機械的な変化を介して、中心窩および周辺の網膜厚が増加すると報告されている。本研究において、脈絡膜厚にも影響が及ぶことが明らかとなった。また、その変化は中心窩より耳側の脈絡膜において明確であった。小児では鼻側より耳側の方が、脈絡膜が厚く血管密度が高いといわれている。そのため、耳側の方が、局所的外傷および手術の炎症を、より受けやすい可能性があると考えられた。 本研究は小児に対する斜視手術における脈絡膜厚の変化を明らかにしたものであり、斜視手術の眼への侵襲における重要な知見を示したものである。よって学位授与に値する内容であると判断した。	